

ととろの里山づくり協議会「登別市」



環境負荷の少ない森林管理

「ととろの里山」というのは、地元の子どもたちが以前、そう呼んでいたひと続きの森のことです。ところが数年前、そのほとんどが一斉に伐採されてしまいました。かろうじて端っこに残されたのが、私の2haほどの所有地でした。森の木の大部分は伐採されてしまいましたが、どうかして昔の里山を再生できないかという願いをこめて、グループにこの名前をつけました。

もともと林業に興味があったわけではありません。きっかけは、林業を目指す若者たち——義理の弟が馬搬林業に取り組んでいます——に出会って、そういう人たちの役に立てないかと思ったことです。活動を始めて4年目ですが、今ではすっかり林業が好きになりました。週末は必ず山で作業しています。

活動エリアは、登別市のポンライバ川右岸沿いの斜面、1.76haの森です。車では近寄らず、作業するためには資機材を担いで1.3kmほど歩かなくてはなりません。途中で川の渡渉もあります。また、まわりは牧草畑で、木材の搬出などで草を傷めないよう、活動はほぼ冬季に限られます。林業をするには制約の多い場所だと思えます。

森の大部分は樹齢57年～61年のカラマツの人工林が占めていますが、樹齢55年程度のトドマツ、イタヤカエデ、ミズナラ、ヤチダモなどの二次林もみられます。この30年ほどほとんど手が入っておらず、林床は高さ2m以上のササやぶに覆われて、歩いて入ることすら困難な状態でした。

この活動を通して「自伐型林業」に取り組むみなさんと出会い、このやり方なら環境に負担をかけずに地域を活性化させ、森を地域の宝にできると確信しました。「ととろの里山」では馬搬を取り入れ、環境負荷の少ない林業を心がけています。

世界の林業の口伝を実験

先日、この森でヤチダモを2本、伐倒して馬搬で運び出し、皮を剥いでからトラックに積んで、フォレスト鉦山ネイチャーセンターまで運びましたが、作業費が10万円以上かかりました。1本6万円のヤチダモなんて、ぜったい売れないですよね？つまり「日本一コストのかかる林業」なのですが、それを逆手にとって、普通ではやれないことをやってみよう、と考えています。

具体的には、1本1本の木を大切に扱い、木材の有効利用の可能性を追及する、といったことです。

私たちの活動は、とにかくササ刈り、ササ刈り、ササ刈りの連続です。4年目の今年、ササ刈りエリアの地表からようやく広葉樹が生えだしているのを確認できました。天然更新が進むことを期待しています。

カラマツ人工林は密植された状態のまま、調べてみると半数以上が立ち枯れていました。治療可能と判断した木には、樹木医と相談しながら「ニカワ炭」と呼ばれる伝統的な薬品を塗って、経過を観察しています。

「新月木伐採」も試みています。新月の日には伐採した木は腐りにくい・曲がりにくい・燃えにくい、というオーストリアの山仕事の伝承にちなんだものです。1本ずつトレーサビリティを高めるタグ(証明書)をつけて10本のカラマツを伐採し、2年かけて自然乾燥させた後、建築用に製材しました。端材もすべて有効活用したいと考えています。

フォレスト鉦山に寄贈したヤチダモは、子どもたちと一緒に5週間ほどかけて削ったり絵を描いたりして、トーテムポールになりました。

何から何まで、木のかけらひとつまで有効利用したい。古今東西の口伝を駆使して、たとえ変化があってもなくても、自分自身で体感してみたい——そう考えていろいろなことに取り組みました。

新たなメンバーも増えており、今後も林業や里山の大切さを伝えていきたいと考えています。



報告者

荒川 昌伸さん

